

限の看護の力を発揮できるように、知識・技術の体系化、情報発信、ひいては専門職の支援等が求められます。一つ一つの課題に取り組んでいきたいと思えます。そして、次はIVR やがん放射線治療などに伴う副作用を予防、軽減する看護、放射線診療に対する患者の不安に向き合う看護師の支援など、臨床看護における新たな取組が始まることを期待します。2つの領域が互いに支え合い、競い合いながら、さらなる学術的な発展につながって行くことを祈ります。

2. 各委員会からのお知らせ

1) 学術推進委員会

《委員会概要》

学術推進委員会は一般社団法人日本放射線看護学会の学術推進を目的とした活動を行っています。具体的には関連学会及び団体との連携強化に関する活動、ならびに学会および学術集会の活性化・学術推進活動を行っています。

《委員》

委員長 : 野戸結花
副委員長 : 西沢義子
委員 : 太田勝正、小山内暢、堀田昇吾

《活動報告》

2021年度は下記の活動を行いました。

(1)学会および学術集会の活性化・学術推進活動
第10回学術集会において、下記の2つの交流集会を開催しました。

①放射線看護モデルシラバスの活用に向けて
ーモデル授業その2 放射線看護ー
学術推進委員会では、文部科学省が策定した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」を受け、放射線看護モデルシラバスを1単位版

と2コマ版で作成し、2019年4月より本学会ホームページで公開しています。

<http://www.rnsj.jp/guidelines-publications/model-core-curriculum/>

当委員会では、モデルシラバスの活用を促進するために、昨年度開催された日本放射線看護学会第9回学会学術集会の交流集会から、モデル授業を紹介しています。第10回学術集会では、モデルシラバス1単位版の6コマ目「放射線治療と看護職の役割」について、弘前大学医学部附属病院の佐藤裕美子先生をお招きして、「前立腺癌永久挿入密封小線源治療を受ける患者と家族の看護」というタイトルで40分のモデル授業を行っていただきました。

モデル授業では、密封小線源治療とはどんな治療なのか、治療に伴う患者さんの有害事象と治療に対する患者さんからの声を紹介いただいた上で、必要になる看護を説明いただきました。さらに、医療者や患者の家族など密封小線源を挿入した患者の周囲にいる人の被ばくについても詳細にお話いただきました。また、佐藤先生からは、密封小線源治療について講義するポイントとして、密封小線源は一般的な外部照射よりも認知度が低い分、画像やビデオなどを活用した講義が学生の理解を促すために重要であるとお話いただきました。講義内容に含めるべき内容として、どのような治療法なのか、線源から出る放射線量が時間の経過に伴ってどのように減衰するのか、看護の実際と患者の声を講義すると良いなど、実践的なアドバイスもいただきました。

交流集会には78名の方がご参加くださいました。交流集会後に実施したアンケート(N=32)では、9割の方々が「参考になった」と回答くださり、大変好評でした。また、同アンケートでは、「放射線看護」に関する教育を行う上で学会に対する要望等を伺ったところ、「看護基礎教育(学部学生対象)の実践報告が

あれば、ぜひ伺いたい」や「モデルシラバスをもっと多くの教育機関が活用するように普及活動を行って欲しい」などのご意見も寄せられました。学術推進委員会では引き続きモデルシラバスの普及に向けて取り組んで参ります。

②放射線看護高度看護実践者による放射線リスクコミュニケーションとは

日本放射線看護学会学術推進委員会の下部組織である、放射線看護専門看護師(仮)活動支援ワーキンググループでは、昨年度から本学会の学術推進委員会の支援のもとに交流集会を開催している。今年度の第10回日本放射線看護学会学術集会でも、今回のテーマの主軸となる「放射線リスクコミュニケーション」について、東京理科大学医療薬学教育研究支援センター教授の堀口逸子先生から基調講演をいただいた。堀口先生は、「放射線リスクコミュニケーション」について、戦略が必要不可欠であり、目的を明確にし、些細なところまでステークホルダーへの配慮と工夫が必要であると話された。ステークホルダーへは「教える」「誘導する」のではなく、「伝える、知らせる、判断してもらう」ことである。そしてリスクコミュニケーションのゴールは、「対処」や「当たり前」のことであり、時間がかかり、他者にはわかりづらく、誉めてもらえず、もどかしきもある。ゴールは必ずしも「発展」ではないことが、事例を交え、説明された。そして、看護職こそ、この役割に適した能力を有する人材であり、そして、放射線看護高度看護実践者への期待が語られた。

続いて、高度看護実践教育修了生3名からは、放射線看護高度看護実践者による放射線リスクコミュニケーションについての活動が報告された。実は、長崎大学、鹿児島大学、弘前大学においては、放射線看護の高度看護実践者育成に向けた大学院教育(修士課程)を開

始し、2019年には修了生を輩出した。その修了生の1年間の実践活動報告とともに日本看護協会の専門看護師制度委員会への専門分野の特定を申請することで、同委員会が審議し、理事会の決議がなされる。しかしながら、日本看護協会の専門看護分野の特定細則には「専門看護分野とは、変化する看護ニーズに対して、独立した専門分野として知識及び技術に広がりや深さがあると制度委員会が認めたものをいう。」とされ、今だ、放射線看護は認定されていない状況にある。そこで、放射線看護専門看護師(仮)活動支援ワーキンググループでは、放射線看護が「独立した専門分野として知識及び技術に広がりや深さがある」活動を実践していることをアピールするために、修了生3名の放射線看護高度看護実践者による放射線リスクコミュニケーションについての活動を報告してもらい、「放射線リスクコミュニケーション」に造詣の深い堀口先生や参加の皆さんからご意見や示唆を頂くことで、放射線看護専門看護師(仮)の誕生実現と発展に向けての活動強化を目指した企画とした。

<活動報告 修了生1>

村上氏は、弘前大学医学部附属病院に勤務し、弘前大学大学院を2019年度に修了して、活動を続けている。村上氏は、今回は、放射線治療を受ける患者とのリスクコミュニケーション、および放射線治療を受ける患者と関わる医療者とのリスクコミュニケーションについて、「リスクの認知ギャップ」および「リスクとベネフィットの関係」を重要視し、その理解に向けての活動に取り組んでいることが語られた。紹介の事例では、看護スタッフ側の実際のリスクと患者の認知リスクを対比し、実際の線量分布図を使用した照射範囲の説明等から患者と看護スタッフ間のリスク認知のギャップが減少した経過が報告された。そして、事前の戦略

が重要であり、ベネフィットを意識し、実践すること、カンファレンスにおける医療者間のリスクコミュニケーションの有効性、看護師の多職種間のリスクコミュニケーションの役割と、高度看護実践者としての活動が語られた。



図1 線量分布図を使った説明資料

<活動報告 修了生2>

松尾氏は、2020年度に長崎大学医歯薬総合研究科を修了して、4月から量子科学技術研究開発機構放射線医学研究所被ばく医療部に放射線看護の高度実践看護師教育課程の修了生として勤務している。今回の発表内容は、修士課程で受講した放射線リスクコミュニケーション教育と、修了生としての放射線リスクコミュニケーションについての考え、医療者への放射線リスクコミュニケーション教育についての説明があった。現在、松尾氏が日々実践している「医療者への放射線リスクコミュニケーション教育」については、看護職としての個性を有する対象者の理解と、その上に成り立つ信頼関係の構築の重要性を理解してもらうように心掛けていること、特に修了した放射線看護高度看護実践者として実践できる放射線リスクコミュニケーションは、線量評価とリスク評価について、科学的根拠をもとに説明できること、対象の心理的・社会的影響を考え、長期的支援の重要性と多職種連携の調整、倫理調整の役割を果たすことが語られた。

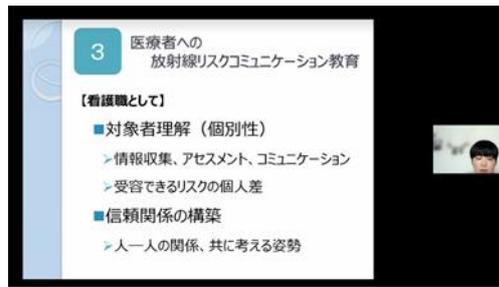


図2 医療者への放射線リスクコミュニケーション教育の説明資料

<活動報告 修了生3>

岡村氏は、鹿児島大学大学院保健学研究科を2019年度に修了して、4月から環境省大臣官房環境保健部放射線健康管理担当参事官室に勤務している。今回の発表内容は、2020年度環境省が実施した放射線による健康影響についての調査結果であった。「現在の放射線被ばくで、次世代以降の人(将来生まれてくる自分の子、孫など)への健康影響が福島県民の方々にどれくらい起こると思いますか?」の質問に対して、「可能性が高い・可能性は非常に高い」と回答した人が全国で約40%であったことが報告された。放射線に関する誤解・差別・偏見を減らすことを目的に取り組む環境省の事業「ぐるぐるプロジェクト つむぐ・つなぐ・つたわる」についての説明があった。そして、今後の事業展開により、2025年度までにその回答者が20%となることを目指すことが語られ、その必要性和教育機関等への参加を呼び掛けた。



図3 環境省の事業「ぐるぐるプロジェクト」資料

最後に、10年以上放射線看護の高度看護実践者養成することを目指した教育に関わり、

修了生がそれぞれ日々高度看護実践者として成長している姿に感慨深いものがある。しかし、当初は放射線看護の概念も不確かなまま、また、ロールモデルもない、実習施設からも目指すものを問われ、手探り状態のままに、学生とともに歩んできた。そして、何度も教育カリキュラムの効果を振り返り、修正し、現行の体制に落ち着いてきた。それは、三大学で活動したこと、福島県立医科大学附属病院の実習支援によって、成果を得ることができた。そして、放射線看護高度看護実践者に求められるものや課題も明らかになり、ここまで発展できているものとする。今回、76名の参加の方々からご意見をいただくことで、この交流集会からも成果が得られたことに感謝する。

(2)「看護職のための眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」普及のための調査

本学会では、2021年4月の法令改正に向けて、「看護職の眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」を昨年11月に取りまとめて公表しました。現場で使いやすいガイドラインを目指して作成しましたが、よりご活用いただけるよう内容の検討を行って参りたいと考え、アンケートを実施いたしました。

調査期間：2021年10月27日～11月26日

回答者：日本放射線看護学会員 99名

方法：無記名のインターネット上アンケート
<質問項目>

- Q1. あなたの職種をお答えください
 Q2. あなたは放射線診療従事者または放射線業務従事者ですか
 Q3. 個人モニターを支給されていますか？(Q2で放射線診療従事者または業務従事者と回答した者のみ回答)
 Q4. 2021年4月から眼の水晶体の線量限度が引き下げられたことをご存知ですか？
 Q5. 眼の水晶体の被ばくについてあなたは不安を感じますか

- Q6. 当学会の「看護職の眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」をご存知ですか
 Q7. 「看護職の眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」の内容はわかりやすいですか？(Q6で「知っている」と回答した者のみ回答)
 Q8. 「看護職の眼の水晶体の放射線防護ガイドライン」は、あなたの業務の役に立ちますか？該当するものすべてを選択してください。(Q6で「知っている」と回答した者のみ回答)
 Q9. 本ガイドラインについてご意見があれば記載ください
 Q10. 水晶体の被ばくについてお考えなどあれば記載ください

以上の調査結果について、学会ホームページ上で報告させていただきました。

第1報：水晶体ガイドラインの周知の状況と個人モニタリングの現状(Q1,2,3,4,6)

第2報：水晶体への放射線被ばくへの不安とガイドラインの活用法について(Q5,7,8)

第3報：水晶体の放射線防護のための課題(フリーコメントを中心に)(Q9,10)

(3)放射線看護専門看護師の活動支援

放射線看護高度看護実践者を教育する教育課程(大学院)の修了生のネットワーク構築支援として、放射線看護キャリア開発グループを設立しました。今年度はオンライン会議を開催し、活動方針の検討および情報交換を行いました。また、上記交流集会は、本活動支援の一部です。

2) 編集委員会

《委員会概要》

編集委員会は、学会誌の編集と発行を行い、主に学会員皆様の論文投稿から論文掲載までの期間に関わります。また、この一連の作業が円滑に進むように編集システムの環境を整え

ています。

《委員》

委員長：吉田浩二

副委員長：北宮千秋

委員：大石景子、佐藤美佳、沼口香織、
堀裕子、三森寧子

《活動報告》

(1) 学術誌第9巻2号を12月に発刊(学会ホームページとJ-stageへ公開)し、現在は第10巻1号(2022年6月発刊予定)の編集作業に取り組んでいます。

(2) 随時投稿から随時掲載までのシステムが整いましたので、論文採択後にはJ-stageにて早期公開が可能となりました。

(3) 昨年より、掲載された論文の中から優秀論文賞を発表し、学術集会にて優秀論文賞受賞者の講演会と表彰式を行っています。2021年度の優秀論文賞につきましても、4月以降に発表予定です。

編集委員会は、皆様の研究成果や情報、放射線看護の実践を一早く発信し、社会に貢献できる学会誌を目指していきます。引き続き、どうぞよろしくお願い致します。

3) 広報・渉外委員会

《委員会概要》

広報・渉外委員会は、日本放射線看護学会の活動を会員の皆様や社会にお知らせし、関連する様々な学術団体等と連携・協働をはかる活動を行っております。

《委員》

委員長：作田裕美

副委員長：桜井礼子

委員：堀田昇吾、新井龍、上野寿子

《活動報告》

2021年度は下記の活動を行いました。

(1) 広報誌(ニュースレター)の発行(年2回発行)

9月と3月に発行しました。9月発行の第8号ではトピックスとして、本委員会委員でもあります東京医療保健大学講師の堀田昇吾先生に「放射線業務(診療)従事者としての看護師に対する【教育・訓練】および【研修】」についてご紹介いただきました。

(2) 学会ホームページの管理・更新

関連団体からの研修案内や研究公募等についてトップページの「お知らせ」に都度情報を掲載いたしました。ガイドライン・刊行物ページの更新、英語版ホームページを更新致しました。

(3) 日本放射線技術学会との協定にそった学術協力の推進

①学術集会企画

放射線業務(診療)従事者に対するRI規制法等(2018年4月から施行)の「教育・訓練」と医療法施行規則(2020年4月から施行)の「研修」が改正されたことを受けて、第10回学術集会において日本放射線技術学会と共同し、以下の講演会を開催いたしました。

日時：9月19日(日) 13:00~14:00

テーマ：放射線業務従事者の現任教育の充実に向けて

講演演者：

日本放射線技術学会 放射線防護部会長

松原 孝祐先生(金沢大学 教授)

日本放射線看護学会 理事長

草間 朋子先生(東京医療保健大学 名誉教授)

座長：

堀田 昇吾先生 (東京医療保健大学)

新井 龍先生 (湘南鎌倉医療大学)

②共同研究

本学会と日本放射線技術学会の会員に貢献する共同研究を進めています。まとまりましたら、ご紹介させていただきます。

4) 国際交流委員会

《概要》

委員会は 2015 年に発足し、放射線看護学に関わる国内外の動向把握と学会員への情報提供、国内外の関連学術団体との連絡・協力、本学会活動の国際的な情報発信の支援等の活動を行っています。

《委員》

委員長：小西恵美子

副委員長：八代利香

委員：後藤あや、生田優子、加藤知子、
山口拓允

《活動報告》

ニュースレター第8号で各委員の自己紹介をしましたが、本委員会のメンバー構成は今期から大きく変わりました。今年度は国際発信に向けた企画をはじめています。学会員向けの国際情報の共有と、国外向けの本学会についての情報発信を、バランス良く進めていければと思います。具体的には、国際学会における本学会の活動を紹介するために、これまでの本学会に関する英語資料を収集して、フランスの CEPN(原子力防護評価センター)等を通じて発表の機会を検討しています。

昨年は東日本大震災に関する 10 周年イベントが数多く開催されました。その一つとして Swiss Federal Nuclear Safety Inspectorate (スイス連邦原子力安全検査局、ENSI)が主催した

Civil Protection Conference 2021 で、オンラインではありましたが発表をしたので、その報告をします。ENSI はスイスの原子力施設の安全に関する機関で、2009 年にエネルギー省から独立しました。2021 年の市民会議のテーマは温暖化でしたが、福島原発事故に関する専門家会議を開催し、事故時の対策について検討する場が設けられました。

<https://www.ensi.ch/de/2021/11/03/bevoelkerungsschutzkonferenz-2021-ensi-thematisiert-notfallschutz-nach-nuklearunfall/>

発表内容は事前に主催者と相談をして、原発事故後の母親のメンタルヘルスとヘルスリテラシーの推進 (Psychological consequences among mothers after the Fukushima Daiichi accident in 2011 and efforts on health literacy promotion)でした。主な内容は、県民健康調査のデータから示される母親のレジリエンス (うつ傾向の減少と育児の自信の維持)、保健医療従事者と地域とのコミュニケーションを促進するためのヘルスリテラシー研修の紹介と、帰還する住民を対象にした生活に関する質問に分かりやすく答えている環境省「暮らしの手引き」の作成についてです。同様の内容は、環境省の日本語ビデオ教材として公開されています。

「次世代と考える放射線に関する情報発信 | 専門家の授業①」

<https://www.youtube.com/watch?v=o79LSh3qDeE>

「暮らしの手引き」

<https://www.env.go.jp/chemi/rhm/shiencenter/shientool/index.html>

主要言語がドイツ語とフランス語であったため、主催者を介してのメールでの質疑応答となりましたが、看護師・保健師の役割について関心が高く、震災直後の状況や対応について質問を受けました。さらに、この発表について複数の参加者が SNS に投稿していたと主催者から

嬉しい連絡があり、改めて国際発信の大切さを認識しました。上記の通り計画している本学会を紹介する国外発信も、海外の関連機関との連携強化や本学会の国際的な認知度を上げる重要な機会として、国際交流委員会のメンバーで協力しながら準備を進めていきます。

3. 学術集会

1) 日本放射線看護学会第10回学術集会 開催報告

日本放射線看護学会第10回学術集会 会長
弘前大学大学院保健学研究科 教授 野戸結花

日本放射線看護学会は2012年に任意団体として発足し、同年9月に第1回学術集会を弘前の地で開催しました。2018年には一般社団法人として新たなスタートをきり、今年は発足から10年という大きな節目を迎えることができました。これもひとえにみなさま方の力強いご支援の賜物と深く感謝いたしております。

さて、節目の10年にあたる学術集会となることから、『放射線看護のこれから 創成とサステナビリティ』をメインテーマとして掲げさせていただきました。Sustainabilityは「維持する・支える」という意味を持つ言葉で、環境と経済、社会の各面においてバランスのとれたかたちで、今の社会や暮らしを将来にわたって維持するという文脈で用いられます。2020年初頭より世界中を震撼させているCOVID-19の感染拡大は未だ予断を許さず、これによって現代医療が抱える脆弱性が顕在化しました。日本ではこれまであまり意識されてきませんでした。人や資機材の枯渇、医療崩壊が現実になり得ることも体感しました。今この瞬間も、最前線にいる多くの医療従事者のみなさま方

は、緊張を強いられる現場で患者さまへの思いや看護への熱情を胸に、日々を過ごされていることと思います。COVID-19による危機に留まらず、加速する少子高齢化に伴う深刻な社会保障財源の不足、巨大災害・複合災害による不測の事態などにおいても、みらいを見通し、質の高い看護を提供し続けることを可能とするためのしくみをつくっていく必要があると考えています。振り返ると私たちの後ろには、放射線看護の先達が長い時間をかけてつむいできた道程があり、本学会が放射線看護学の確立と深化・発展を目指して活動を続けた10年があり、放射線に関連した他の専門領域との協働の積み重ねがあります。本学会の節目にあたり、放射線看護のこれからについて、変わりゆく社会の情勢やニーズを踏まえながら、普遍的で変わらないものと新たな発想の転換が求められるものを、「創成とサステナビリティ」という視点で、皆様と共に深める場としていきたいと考えました。

第10回という節目を迎える学術集会ではありましたが、COVID-19の収束が見通せないことから、昨年に引き続きWeb開催とし、2日間はオンライン配信、その後1か月間をオンデマンド配信としました。会期中は19の学術発表、9の交流集会のほか、会長講演、基調講演、特別講演、3つの教育講演、教育セミナー、2つのリレーシンポジウム、スペシャルインタビューを配信し、243名の方々にご参加を頂きました。Web開催であることから、ご参加のみなさま方との交流や意見交換の機会の制限はありましたが、ご移動の労なく、ご自宅等でお好きな時間にゆっくりご視聴いただくことができ、放射線看護に心を傾けるみなさま方の学術活動に多少なりともお役に立てたのではないかと考えております。ご参加を頂いた皆さま、ご講演を頂いた演者および座長の皆さま、ご支援を頂いた企業の方々、そして、本学術集会の企画・

運営に精力的に取り組んでくれた委員に心より感謝申し上げます。

第11回学術集会は2022年9月17日(土)、18日(日)に東京都で開催されます。本学会にとっての次の10年に向けた新たなスタートとなる重要な学術集会です。次回こそは、会場で直接交流し、放射線看護について熱く語り合える機会となることを祈っております。多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

2) 日本放射線看護学会第11回学術集会 のご案内

日本放射線看護学会第11回学術集会 会長
東京医療保健大学 立川看護学部
教授 桜井礼子

第11回学術集会を2022年9月17日(土)、18日(日)に下記の通り開催いたします。

本学術集会のテーマは「Client-Oriented Radiological Nursing ～放射線看護が挑むイノベーション～」としました。放射線診療をはじめとして、様々な領域における放射線利用は、目覚ましい勢いで日々進化・進展しております。患者さんや住民のみなさまにとって最も身近な存在である看護職が、放射線利用においても対象者(Client)の皆様に寄り添い、放射線看護を提供できる仕組み、環境づくりに挑戦する学術集会にしたいとの思いから、このテーマを設定いたしました。これまで本学会および会員の皆様が取り組んできた放射線看護を振り返り、放射線を取り巻く環境の変化をみすえ、時代・社会のニーズにしっかり応えられる放射線看護を目指し、みなさまと共に考え議論し、放射線看護の新たな価値を見いだす機会としたいと考えております。

第11回学術集会のテーマの実現を目指し

て、以下の企画を考えております。参加者のみなさまにとって、有意義な学術集会になるよう準備してまいります。

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

《学術集会の概要》

1. 会期

2022年9月17日(土)・18日(日)

2. 会場

たましん RISURU ホール (立川市市民ホール)
(〒190-0022 東京都立川市錦町3丁目 3-20)

3. 学術集会のテーマ

Client-Oriented Radiological Nursing

～放射線看護が挑むイノベーション～

4. 演題募集期間

2022年4月11日(月)～6月24日(金)

5. プログラム

【会長講演】

「放射線看護が挑むイノベーションとは」

【基調講演】

「変革し続ける医療におけるチーム医療」

演者 細田満和子(星槎大学)

【特別講演】

「思慮深いまなざしをはぐくむために～放射線・原子力利用と看護職への期待～」

演者 神津カンナ(作家・エッセイスト)

【教育講演】

(1) 「がん医療における意思決定支援」

講師 川崎優子(兵庫県立大学)

(2) 「現場の看護職に役立つ最新のケア」

講師 後藤志保(がん研究会有明病院)

(3) 「最先端の核医学治療」

講師 東達也(量子科学技術研究開発機構量子医科学研究所)

【シンポジウム】

テーマ：『看護職にかかわる放射線防護の

“今”と“これから”』

【パネルディスカッション】

テーマ：『科学とこころの架け橋となる看護職』

【学会企画】

【交流集会】

【演題発表（口演・示説）】

【ワークショップ】

【市民公開講座】

【市民イベント】

6. ホームページ

<http://conference.wdc-jp.com/rnsj/11/>

【編集後記】

次回発刊は、2022年9月を予定しております。

皆様からのご意見や情報提供、ご要望など、事務局にお気軽にお寄せくださいませ。

広報・渉外委員会

作田裕美、桜井礼子、堀田昇吾、
上野寿子、新井龍